

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 津 曲 真 一

本論文は、チベット仏教古密呪派中興の祖、ロンチェンパ（1308－63）の著作『大究竟禅定安息論』の読解をもとに、同派の究極的な真理である「大究竟」の意義を宗教学的に解明した労作である。古密呪派は、チベット仏教中で独自の位相をもつ宗派で、その中心概念である大究竟は、これをチベット独自の宗教概念として重視するボン教と共有される概念であるが、ロンチェンパは、この概念を仏教の到達点である解脱の意義と捉え、同派の仏教としての体系化を成し遂げた人物とされる。その意味で、本論文は、チベット宗教全体の理解に不可欠の主題を扱い、しかも、日本密教では受容されなかったインド後期密教タントラを基礎に体系化された修行論を吟味する内容である。

論文の構成は、序章を含め全7章構成で、「はじめに」と序章で著者の問題関心と主題が整理され、第一次文献と先行研究の解説がなされた後、第1章で、ロンチェンパの生涯と時代が、伝記を基礎にして概観される。第2章では、「大究竟」思想の理論が、その真理観を中心に解説される。副題の『禅定安息論』は儀礼の実践書であるため、大究竟は理論化されておらず、ここでは、ロンチェンパの他の著作から、その真理観が抽出される。第3章から第5章までは、『禅定安息論』の内容が吟味され、瞑想のための環境の選定、人間論、そして、人間の機根に沿った実践論の諸相が解説される。人間論においては、発心の重要性を説く暇満思想や、正しきラマ（師僧）への帰依が説かれ、実践論では、前行と正行の後に、「後の次第」として、誤った修行を修復することの重要性が指摘される。

最終の第6章では、大究竟体験における修行者の意識の変容と真理の顕現のあり方について、津曲氏の宗教学的な論点が考察される。大究竟の真理描写において、精神集中は分別の観想から無分別へ進み、精神は純化し持続化されて禅定に入る。ここでは面授という鍵概念が重視され、これを含めて、「光明の原智」、「領悟」、「密意」という四顕現によって究極的な真理体験が終局に達する。その際、精神集中が解消されるある種の弛緩状態が生じ、顕現は消滅せず、しかも修行者が真理と合一することなく、その顕現を把握しない主体として存続する。津曲氏はこの真理と無媒介に出会う状態に着目し、大究竟の真理の自己顕現内に「主体」が存続する状態を「純粹意識・純粹主体性」と捉える。

本論文は、ロンチェンパの体系化がいかなる意味で「仏教化」なのかという点や、第6章の分析の主眼が心理的体験論なのか真理構造の提示なのかという点など、今後一層の精緻化が期待される。しかし、現地での2年間にわたる参与研究と深い言語理解に裏付けられたチベット語テキストの厳密な文献解釈を極めて明晰に提示し、「大究竟」概念の体系的理解とその普遍的意義を提示できたことは、この分野における重要な貢献であり、本委員会は、本論文を、博士（文学）に相当するものとして判断する。